

学級の状態を把握し、規範意識の育成をめざす

アセスメント・ツール

HiYoCoシステム

How is your class condition?

「活用マニュアル」



京都市総合教育センター

研究課

< 目 次 >



1. 「HiYoCoシステム」とは	1
(1)規範意識と自尊感情 (2)対人関係能力 (3)道徳的価値	
2. 付属のCD	2
(1)調査 (2)分析 (3)取組	
3. アンケート調査の実施	3
(1)アンケート用紙の準備 (2)アンケートの実施 (3)事後の処理	
4. アンケート結果の入力	5
(1)「診断シート」の選択 (2)「入力S」の選択 (3)「入力S」への入力	
5. 分析結果の出力	6
(1)各学級の分析 (2)「各学級の分析」結果の見方 (3)各種資料について	
6. 分析後の取組	9
(1)七つの項目の定義 (2)各課題の「傾向」と「対策」 (3)具体的な取組のヒント	
7. 学年会での活用	18
(1)準備する資料 (2)会議の手順 (3)会議での時間配分	
(4)校内研修会での活用 (5)継続的な取組へ	

1. 「HiYoCoシステム」とは

学級状態の把握は、学級担任にとって大切です。全ての学習活動の主体者は生徒であり、教師は支援者です。教師が生徒の実態と学級の状態を把握することにより、適切な支援が可能になり、高い学習効果につながります。このことから、「正確に」「客観的に」「短時間で」学級の状態を評価するツールが必要であると考え、この「HiYoCo(ひよこ)システム」を開発しました。

「HiYoCoシステム」は、「How is your class condition?」(あなたの学級はどのような状態ですか)から名前を付けました。このシステムは、生徒に対してアンケート調査を行い、その結果を数値化し、京都市の平均値と比較して学級の状態を判断するものです。

「規範意識の現状」「自尊感情の状態」「対人関係能力の高さ」「学級の居心地」の4要素の状態を測定し、相対評価によって判定します。この判定を用い、学級に関わる全ての教師が統一された認識の下で継続的に指導にあたることは、学習効果や生徒指導の観点で有効であると考えます。

それでは、このシステムの基盤となる「三つのポイント」について述べます。

(1) 規範意識と自尊感情

規範意識とは、「規範(ルールやマナーやモラルなど)に進んで従い、大切にしたいという意欲や姿勢」のことです。つまり「知識」や「技能」ではなく、「気持ち」や「感覚」であり、学習したり訓練したりして身に付けるものではありません。例えば、ある集団の中で、自分が満足感をもち、「この集団を維持したい」という気持ちになり、集団の秩序を保つために、自然に「ルールやモラルを守ろう」とする感覚が規範意識です。

生徒が集団の中で「自分の存在価値」を感じていることと規範意識とは密接に関係しています。「自己肯定感」「自己有用感」「自己効力感」などの「自尊感情」に関わる項目を高めることが、規範意識の向上に重要です。学級担任は、生徒の自尊感情の高さを測り、「褒める」と「叱る」の指導バランスについて考えることが必要だと思えます。

(2) 対人関係能力

規範意識は集団や社会の中で育まれるものです。他者を感じることで、どのような言動をすれば、互いに良い人間関係を築いていけるのかを考えることにつながります。しかし、近年の社会変化によって能動的に他人と関わろうという意欲をもった生徒が少なくなりました。

アンケート調査の結果より、「意見を出すことができる」と自信をもった生徒の数が少ないことがわかります。このことは、意見を発表できるスキルが身に付いていない生徒が多いこと、学級に意見を言える雰囲気が無いことの、二つの原因が考えられます。教師が意図的、計画的に生徒の対人関係のスキルを高める学習を行うこと、学級での親和的な雰囲気をつくることが大切だと思えます。

(3) 道徳的価値

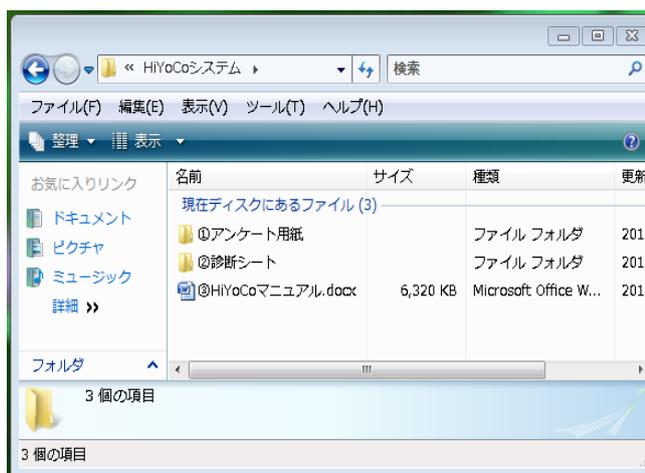
学級の中で、人間関係が深まっていても、規範意識が向上しているとは限りません。友だちは多いけれど「良くない友だち関係」となっている場合があります。そこで、人間関係を深めることと並行して、「道徳的価値」を身に付けていくことが大切です。

道徳の時間で、他者の「思い」や「価値観」を知ることは、生徒の道徳的価値の自覚を深めることにつながります。また、他の教育活動の中でも、教師は生徒の道徳性を発達させるために意識的に支援することが重要になると思えます。

2. 付属のCD

○付属のCDには、次のフォルダ及びファイルが入っています。

<p>①アンケート用紙</p> <ul style="list-style-type: none">・アンケート（A3）・アンケート（A4） <p>②診断シート</p> <ul style="list-style-type: none">・診断シート（Aタイプ）・診断シート（Bタイプ）・診断シート（Cタイプ）・診断シート（入力例） <p>③HiYoCo マニュアル</p>



○「HiYoCoシステム」の基本的な使い方は、次のような流れになります。

(1) 調査

- ・『アンケート（A4）』もしくは『アンケート（A3）』を出力する。【→P. 3】
※どちらのPDFも内容は同じです。
- ・生徒の人数分を印刷し、アンケートを実施します。

(2) 分析

- ・計算ソフトの『診断シート』にアンケート結果を入力します。【→P. 5】
※学級数に応じて、Aタイプ・Bタイプ・Cタイプを選択します。

・『診断シート』については、使用するパソコンに「保存」してください。CDへの直接保存は「読み取り専用」のためできません。（ファイル名を変えてパソコンに保存することは可能です）
※複数の教師が入力する場合は、共有している「サーバー」に保存することを推奨します。

- ・「入力シート」にアンケート結果を入力することで、「出力シート」「項目一覧表」「学年分析」「全体分析」が自動的に作成されます。
- ・「印刷」を指示すると、「各学級の診断資料」や「会議用の各種資料」が印刷されます。【→P. 8～】
※印刷はA3印刷ができるプリンターを使用してください。見やすさの観点からカラー印刷を推奨します。

(3) 取組

- ・各課題の「傾向」と「対策」を確認します。【→P. 10】
- ・具体的な取組を読み、これからの学級経営についてのヒントにします。【→P. 11】
- ・学年会や校内研修会などで、「診断シート」の資料を活用します。【→P. 18】

※『HiYoCo活用マニュアル』のデータについては、「実施前の打合せ」や「実施後の会議」等で複数部数必要な場合、印刷して利用してください。

3. アンケート調査の実施

「診断シート」は、A3用紙の裏表になっています。質問内容は37の質問から構成され、(ア)～(エ)の四択になっています。表紙には学年や学級番号、性別について記入をしますが、氏名については記入をさせません。これは生徒ができる限り本音で回答するための配慮です。

(1) アンケート用紙の準備

- ・ 付属CDより「①アンケート用紙」→「アンケート (A4)」を開き、印刷します。



- ・ A4用紙で2ページ分が印刷されます。【→P. 4】
※字の読みやすさの観点から、**A3裏表に「141%拡大」**することを推奨します。
- ・ カラーで印刷されますが、白黒印刷でも十分活用できます。
- ・ 生徒人数分印刷し、「表」が外になるように二つ折りにします。

※「アンケートA3」を使用する場合は、A4用紙で4枚印刷されます。本誌4ページを参考に「裏」「表」を組み、A3用紙2枚分のアンケート用紙「原版」を作ります。

(2) アンケートの実施

- ・ 10分程度の時間で行うことができます。
- ・ 次の①～⑧の手順で進めてください。

- ①筆記用具の準備を確認します。
- ②「表紙」を上にして、合図があるまでは中を見ないように指示をします。
- ③ほかの人と相談したり、のぞいたりしないよう指示をします。
- ④二つ折りにされたアンケートを配布します。
- ⑤表紙の「記入にあたってのお願い」を教師が音読します。
- ⑥「始め」の合図で10分間アンケートを行います。
- ⑦7分後に表紙裏の「質問4」の記入をしたかを確認します。(記入漏れが多いため)
- ⑧10分経過したら、「終わり」の合図でアンケートを回収します。
- ⑨回収するとき中を見ないように指示をします。

(3) 事後の処理

欠席生徒は、後日に行うようにします。(学級の平均値を求め、次の経過変容を見るため)

学級診断シート

4. あなたの学校での様子について、最も近いもの一つを選んで、記号に○をつけてください。

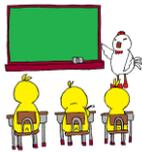
	できている	どちらかといえはできている	どちらかといえはできていない	できていない
①わたしは、進んで授業に取り組んでいます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
②わたしは、係活動や清掃活動などの決められた役割に、しっかり取り組んでいます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
③わたしは、自分で決めたことは、うまくいかないことがあっても、最後までがんばります	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
④わたしは、クラスで何かを決めるとき、意見を出すことができます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑤わたしは、仲の良い人から頼まれても、正しくないことは断ります	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑥わたしは、友だちを遊びや活動にさそうことができます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑦わたしは、悪いと思ったことは、自分からあやまることができます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑧わたしは、相手の気持ちを考えて行動することができます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑨わたしは、相手との約束を守ることができます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)



How is your class condition?

—記入にあたってのお願い—
 ・このアンケートは、みなさんのルールやマナーについての考えを知ろうとするものです。成績とは関係がありません。また意見やプライバシーが外に出たりすることはありませんので、日頃考えていることや思っていることを素直に答えてください。
 ・記入については、(ア) (イ) …の記号に直接○印をつけてください。
 ・回収するときは、この表紙を上にし、中を見ないようにしてください。

() 中学校 () 年 () 組 (男・女)



HiYoCoシステム



この用紙をコピーし、拡大して使用することも可能です。



1. もし、クラスの人が次のようなことをしていたら、あなたはどう思いますか。それぞれ当てはまるもの一つを選んで、記号に○をつけてください。

	とても悪いことだと思ふ	少しは悪いことだと思ふ	あまり悪いことだと思わない	まったく悪いことだと思わない
①授業中に勝手なおしゃべりをしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
②授業中にいねわりをしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
③友だちの悪口を言っている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
④髪の色を染めている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑤校庭や廊下にごみをすてている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑥人の持ち物にいたずらをしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑦学校をずる休みしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑧ろうかの壁に落書きをしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑨定期試験でカンニングをしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑩タバコを吸っている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)

2. 町の中で、知らない人が次のようなことをしていたら、あなたはどう思いますか。それぞれ当てはまるもの一つを選んで、記号に○をつけてください。

	とても悪いことだと思ふ	少しは悪いことだと思ふ	あまり悪いことだと思わない	まったく悪いことだと思わない
①電車やバスの中で女性が化粧をしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
②コンビニの入口付近でべたに座り込んでいる	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
③電車やバスの車内で携帯電話を使って話している	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
④赤信号なのに車が来ていないので道路を横断している	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑤公園で禁止されているボール遊びを小学生がしている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑥小学生がタバコを吸っている	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)

3. あなたの気持ちや様子について、最も近いもの一つを選んで、記号に○をつけてください。

	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	思わない
①わたしには、いろいろ良いところがあります	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
②わたしは、自分自身が好きです	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
③わたしは、現在「幸せ」です	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
④わたしは、まわりの人の役に立っています	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑤わたしは、まわりの人に信頼されています	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑥わたしは、まわりの人に「すごいね」「がんばったね」と言われることがあります	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑦わたしは、自分のクラスが気に入っています	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑧わたしは、困ったり、悩んだりしたとき、クラスに相談できる友だちがいます	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑨わたしは、クラスの仲間と一緒にいると楽しいです	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑩わたしは、クラスの人にどう思われているのか気になります	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑪わたしは、クラスの人の意見に流されてしまうことがよくあります	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
⑫わたしは、クラスで何かをするときに、うまくいくか心配になることがよくあります	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)

(2)「各学級の分析」結果の見方

①単純集計

- ・学級内で(ア)～(エ)を選択した人数を表示します。
- ・「学校における行為」の項目でタバコを容認したり、「所属感」の項目で相談できる友だちがいなかったりするなど、配慮したい生徒の人数がどの程度いるのか把握することができます。

②単純割合

- ・学級内で(ア)～(エ)を選択した人数の割合(%)を表示します。
- ・各項目について、生徒の意識がどのような割合なのかイメージしやすくしています。

③平均値

- ・リッカート尺度を用い、各質問の平均値を表示します。
- ・アンケートのプラス傾向(良い、望まれる)より4点～1点と点数化し、学級平均値を求めます。
- ・平均値が高いほど、学級の生徒は「規範意識が高い」「自尊感情が高い」「対人関係能力が高い」「学級の居心地が良いと思っている」という状態です。
※「安心感」については調整され、他の項目と同様に点数が高いほどプラス傾向になります。

④平均値のグラフ表示

- ・平均値をわかりやすく棒グラフで表示します。
- ・中央値は2.50であり、平均値が低いと学級状態が悪い傾向にあります。

⑤平均値差のグラフ表示

- ・自学級と京都市との平均値差を棒グラフで表示します。(※)
- ・それぞれの項目には中学生の一般的な傾向があるために、④の棒グラフではわかりにくい点があります。そこで、京都市全体の平均と比較して、項目ごとのプラス(良い)傾向、マイナス(悪い)傾向を明らかにすることで、自学級の「特筆すべき点」を明らかにします。

⑥9項目の五段階評価

- ・9項目について京都市平均を基準として、「A・B・C・D・E」の五段階評価をします。
- ・五段階の境界数値については、基礎データよりそれぞれの項目について設定しています。

このように、平均値差を用いたグラフ表示にすることで、単純に学級平均をグラフ表示したものより、学級の状態を詳細に知ることができます。プラス傾向の項目については、関連するこれまでの取組を継続・強化し、より高めることができます。マイナス傾向の項目については反省・改善を行い、補強する取組を考えていくこととなります。

※「京都市平均」について

この「HiYoCo システム」では、平成24年7月に研究協力校2校で実施したアンケートを基に「京都市平均」と仮定して、学級状態の対比や評価を行っています。

このときの調査回答数は1730であり、京都市の公立中学校生徒の5.6%の数に相当します。しかし、2校だけのデータであり母集団からの抽出に偏りがあるため、統計学的には「京都市平均」としては不十分なものです。

このことを理解した上で、このシステムを活用してください。

(3) 各種資料について

- ・各学級の「分析シート」のほかに、次のような「①～③」の資料が自動的に出力されます。
(Aタイプの診断シートの場合、23～25番目のシート)
- ・「印刷」の指示によって、プリントアウトすることができます。
- ・これらの資料を、学年会や校内研修で活用することにより、取組効果を高めることにつながります。

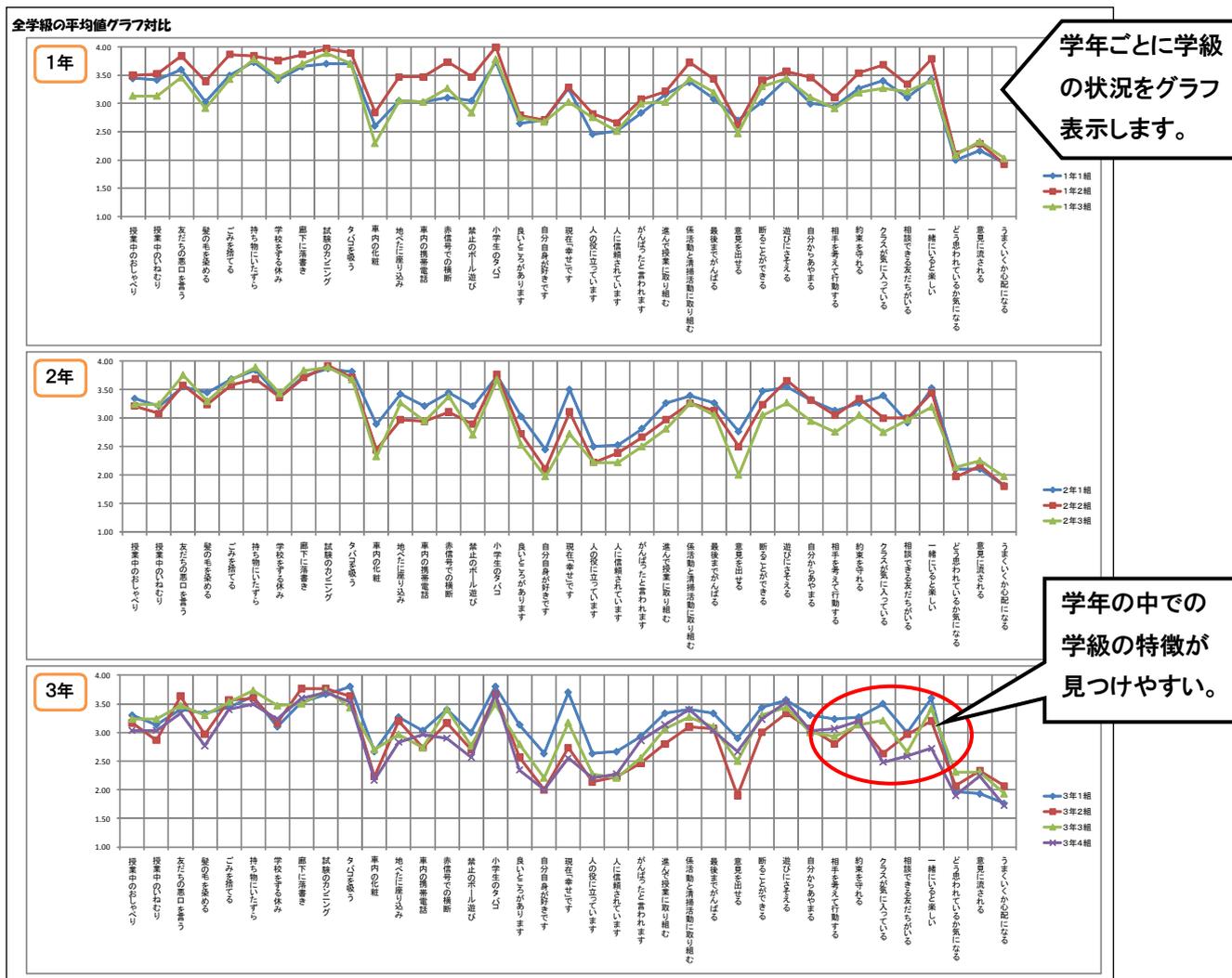
①全学級の評価一覧表（「項目一覧表S」より）

（仮想の学級データ）を1年3学級・2年3学級・3年4学級分入力、Aタイプの分析シートを使用）

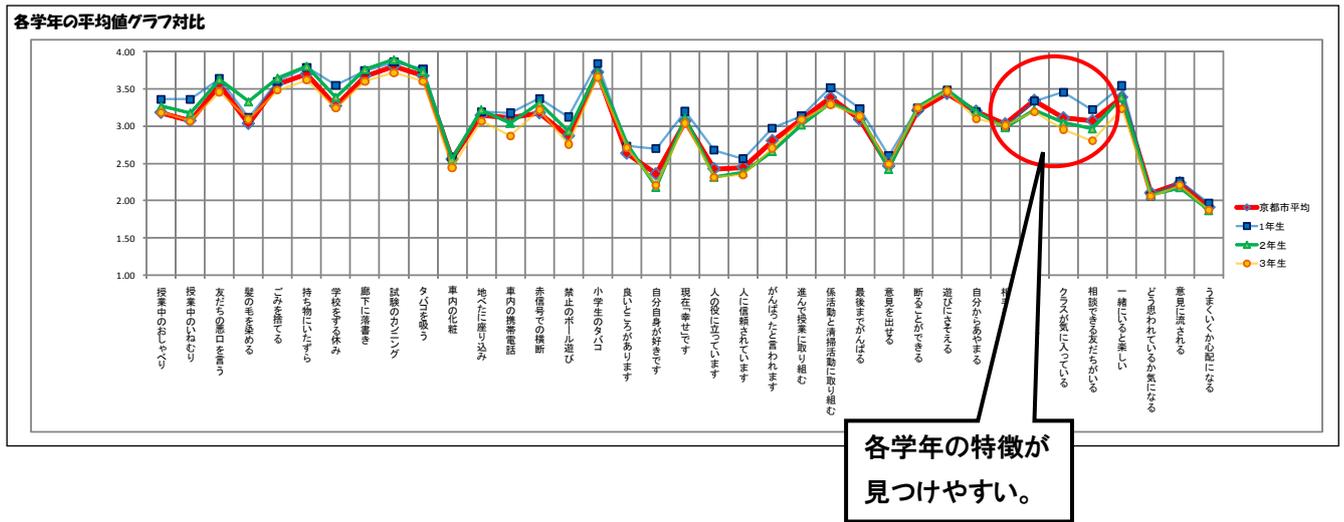
	規範意識の現状		自尊感情の状態			対人関係能力の高さ		学級の居心地	
	学校における 行為	社会における 行為	自己肯定感	自己有用感	自己効力感	自己表現力	他者配慮力	所属感	安心感
1年1組	C	C	B	C	C	C	D	B	C
1年2組	A	A	B	A	A	B	A	A	C
1年3組	C	C	B	B	C	C	D	B	C
2年1組	B	B	A	C	B	B	C	B	C
2年2組	C	C	C	D	C	B	C	C	D
2年3組	B	C	E	E	D	E	E	D	C
3年1組	C	B	A	B	B	A	B	B	E
3年2組	C	D	E	E	E	E	E	E	B
3年3組	C	C	C	D	C	C	E	C	B
3年4組	D	E	E	C	C	B	D	E	D

学校全体の
状況を一覧
で出します。

②全学級の平均値グラフ対比（「学年分析S」より）



③各学年の平均値グラフ対比（「全校分析S」より）



6. 分析後の取組

(1) 七つの項目の定義

「自尊感情の状態」「対人関係能力の高さ」「学級の居心地」を測る項目として、以下の七つの項目について、それぞれ次のように定義しています。

①自己肯定感（自尊感情）

- ・自分は、かけがえのない大切な存在なのだと思う感覚

②自己有用感（自尊感情）

- ・他者の存在を前提として、自分の存在価値を感じる感覚

③自己効力感（自尊感情）

- ・ある事柄に自分が働きかけ、成功する予測ができる感覚

④自己表現力（対人関係能力）

- ・自分の気持ちをうまく表現して、相手に伝える能力

⑤他者配慮力（対人関係能力）

- ・相手の気持ちを正しく理解して、自分を合わせる能力

⑥所属感（学級の居心地）

- ・学級や学校の一員として加わっていると思う感覚

⑦安心感（学級の居心地）

- ・気にかかることなく、心が落ち着いている感覚

(2) 各課題の「傾向」と「対策」

①自己肯定感が低い

- 【傾向】・自分の現在の姿を認められない。
・他者と比較して、自分に自信がもてない。
- 【対策】・自分の良さを認識する場面を増やす。
・学校行事などの場面で、「褒める」機会を増やす。

②自己有用感が低い

- 【傾向】・年齢相応の精神性や社会性が発達していない場合が多い。
・対人関係能力が低く、周囲とのトラブルが多く発生する。
- 【対策】・他者に感謝される場面を増やす。
・人と関わる体験的な活動を計画する。

③自己効力感が低い

- 【傾向】・過保護や過干渉が原因で、自分の意思で行動していない場合が多い。
・失敗をイメージし、活動することに尻込みをしてしまう。
- 【対策】・周囲から応援や励ましを受ける機会を増やす。
・スモールステップ法によって、簡単な成功体験を積み重ねる。

④自己表現力が低い

- 【傾向】・他人に関わろうとする意欲が低い。
・友だちよりも、先生や親の言うことを優先する。
- 【対策】・小集団活動を行う場面を増やす。
・意見交流や話し合い活動などにより、みんなの前で発表する経験を積み重ねる。

⑤他者配慮力が低い

- 【傾向】・自己愛が強く、相手に関心を示さない。
・感情のコントロールができず、周囲の人に迷惑をかける。
- 【対策】・友人と関わる基本的なスキル「話すこと」「聴くこと」をトレーニングさせる。
・親和的な学級づくりを目標に指導を続ける。

⑥所属感が低い

- 【傾向】・自分を否定して他人と関わらなくなる。
・注目を集めるために、不適切な行動をする。
- 【対策】・一人一人の生徒の良さを認め、学級全体に伝えていく。
・行事の中で、学級の仲間たちと喜びや感動を共有させる。

⑦安心感が低い

- 【傾向】・意思表示や話し合い活動が進まない。
・不登校傾向になる場合もある。
- 【対策】・教師の指導方針を明示し、毅然とした態度で子どもに接する。
・「話すこと」「聴くこと」を大切にする指導を徹底する。

(3) 具体的な取組のヒント

① 自己肯定感が低い

A. 日常の活動

- ・教師は生徒を「認める」ことを心がけているでしょうか。頭ごなしに指導をすることが多くはないですか。自己肯定感が低い学級は、教師が独善的に学級指導を行っていることが多いようです。学級担任の前では問題行動は起こりにくいものですが、タイプが違う他の教師の前では態度が悪い生徒もときどきいます。このような状態は、規範意識が身に付いているとはいえません。
- ・教師が生徒を「褒める」「認める」ことを率先して行うよう心がけましょう。また、子ども同士が「褒める」場面をつくる取組も有効です。教師は学校行事や部活動など生徒の活躍について、常にアンテナを張っておき、「褒める」「認める」ための材料を探しましょう。
- ・教師が安易に褒めすぎて、生徒の自己肯定感が高くなりすぎるのも問題です。「叱られる」ことへの耐性が弱くなり、不適応を起こす生徒もみられます。「褒める」基準を下げ過ぎず、生徒自身の中で理想像の基準をつくれるような指導を心がけましょう。人に褒められなくても納得し、自分自身を認める、真の自己肯定感を高めていきましょう。

B. 学習活動

- ・教科担任は、学級担任に比べて生徒との人間関係が希薄なことが多いものです。「この先生が話されることは自分に意味がある」と生徒からの信頼を得て、教師が「意味の無い他人」ではなく、「関係ある他人」となることが大切です。そのためには、生徒にとって「わかる授業」「面白い授業」「楽しい授業」となるように、教科指導に力を入れなければなりません。そのような教師から「褒められる」「認められる」ことは、生徒の自己肯定感を高めることにつながります。
- ・運動に自信があったり、友人関係が良好であったりしても、学習面でのつまずきは生徒の自己肯定感の低下に大きく影響します。学習面のサポートを常に心がけていきましょう。

C. 道徳の時間・学級活動

- ・道徳の授業では、教師は生徒の発言を受容的な態度でとらえましょう。否定的な態度を見せると、「もう二度と発言したくない」という気持ちにさせてしまいます。また、生徒の発言を黒板に書くことは、「自分の意見が認められた」という「思い」をもつことになり、自己肯定感の上昇につながります。教師が「なるほど、それで…」「もう少し説明を聞きたいな」と発言をうながすことで、生徒は真剣に自分の意見を聞いてくれていると感じます。
- ・学級活動では生徒が議事を進めた際、終わったあとに教師が適切な評価をしましょう。「ここは良かった」「ここをもう少しこうしたら」とアドバイスをすることで、「先生が自分を見守ってくれているんだ」と、自分の存在感を感じます。生徒の言動を「褒める」とときには、みんなで拍手をすることを心がけましょう。



②自己有用感が低い

A. 日常の活動

- ・朝学活や終学活では、教師主導で議事を進めていないでしょうか。生徒に任せると、手際が悪く時間がかかることも多いかも知れません。そのため、つい教師主体で学級活動を進めたり、マニュアルどおりに生徒に進めさせたりしてしまうことがあります。大体の流れだけを示し、あとは生徒主体で話し合い活動が行えるように、スキルを高める取組を計画的に設定しましょう。
- ・自己有用感を高めるためには、他者に関わり、「認められた」「感謝された」などの実体験が必要になります。例えば、年少者や高齢者に対する「ふれあい活動」や「ピア・サポート（※P.20①）」などの機会を教師が提供することが有効です。教師は「ありがとう」「うれしいよ」「あなたのおかげ」などの感謝の「言葉かけ」を意識的に行っていきましょう。更に、学級通信などで保護者にも活躍を伝え、二次的な「言葉かけ」も積極的に行いましょう。
- ・生徒の行動の中には、教師に気付いて欲しいと考えている行動もあります。生徒の「頑張り」や「褒められる行動」に気付けるように、教師は感覚を磨く必要があります。

B. 学習活動

- ・授業で発言することは自己有用感を高めることになります。講義形式の授業ではなく、生徒の発言を引き出し、双方向に思いや考えを出し合える授業づくりを心がけましょう。
- ・小集団活動は生徒間での発言機会が増えることになり、自己有用感を高める有効な手段になります。積極的に授業に取り入れていきましょう。また、このときの準備や後片付けなどについても、細かく評価を行い、「褒める」「認める」ことを忘れないようにしましょう。
- ・試験の結果の評価だけでなく、発言の内容、ノートやレポートの書き方、作業の技術などを評価して、良い結果についてはみんなに伝えていきましょう。教科の総合的な能力は高くはなくても、様々な活動の中には光るものがあるはずです。その部分に意識的にスポットを当てるようにしましょう。

C. 道徳の時間・学級活動

- ・道徳の授業では、発言を引き出すために「仕掛け」が必要になります。ネームプレートを使う方法、付箋を利用する方法などの「道具」を使うことは有効です。教師は、手持ちの「技」の数を増やし、生徒が飽きないように工夫をすることを心がけましょう。また、生徒の書いた「感想」については、教師が一言コメントを添えて返却するようにしましょう。終学活や学級通信などで紹介することも自己有用感を高めることにつながります。
- ・学級活動では、生徒主体の自治活動を行えるようにしましょう。そのためには、学級内で「リーダー」と呼ばれる生徒を、意図的に育成しなければいけません。話し合い活動での議事進行のスキルを高めるために、担任教師は生徒と事前に打合せと練習を行ったり、事後に反省会を行ったりする必要があります。生徒を育てるために手間を掛けることを惜しんではいけません。



③自己効力感が低い

A. 日常の活動

- ・生徒の努力に対して、相対評価による言葉かけをしていないでしょうか。褒めてもらえる結果だと生徒が期待しているのに、学級担任から「ここが残念だったな。」「もう少しで、〇組に勝てたのに。」などの評価をされると、今後の活動意欲の低下につながります。手放しの笑顔で、生徒とともに喜んでみましょう。
- ・目標をスモールステップに設定して簡単な成功体験を積み重ねることが有効です。教師が、生徒の努力や頑張りを学級内で紹介して、その生徒が周囲からの応援や励ましが受けられるようにします。また、他者の成功体験を観察させることで、自分が成功したときの良いイメージがもてるようにすることも有効だと考えます。
- ・簡単に達成できる目標を設定すると、成就感が希薄になり、失敗に対する耐性も低くなるため注意が必要です。適度な目標設定のアドバイスをすることを心がけましょう。また、自己効力感を高めるためには、自分の意思決定を大切にすることも必要です。

B. 学習活動

- ・到達度評価だけでなく、個人内評価を心がけることが大切です。評価については必ず生徒に返すようにします。その際には、基準を明確にして生徒が納得できるようにしましょう。
- ・「自分が成長できた」と実感することは、学習意欲の向上につながります。反対に「効果がない」「成果が見えない」と考えてしまうと意欲の低下につながってしまいます。生徒の学習意欲を高めるためには、効果を測定できる「ものさし (バロメーター)」の提示をしましょう。
- ・目標設定をアドバイスするためには、生徒一人一人の能力を正確に把握することが重要です。日頃から評価を詳細に、記録しておきましょう。
- ・試験の記述問題などで、生徒の努力に対する「部分点」を与えるなど、努力が評価されるという感覚がもてるようにします。

C. 道徳の時間・学級活動

- ・道徳の授業では、新しい「気付き」がもてるように工夫します。そのためには、授業の中に子どもの心にゆさぶりをかけることが必要になります。生徒に「先生はこんなことを教えたいのだろう。」と読まれてしまうと授業がつまらなくなります。授業の中に生徒を惹き付ける工夫を仕掛けてみましょう。これにより、生徒は「新しい発見」と「自分の心の変化」に満足感がもてるようになります。
- ・学級活動では、自分たちで決めた「約束事」や「ルール」について、大切にしていこうとする気持ちをもてるようにします。そのためには、教師から指示されたものではなく、自分たちで自主的に決めたという意識をもたせることが大切です。生徒だけで作る「約束事」には、「寛容さ」を認めないものもあります。守らない者に対して罰を与えるなど厳格すぎるものにしてしまうこともあるため、教師が適切な助言や指導を加えることも必要です。



④自己表現力が低い

A. 日常の活動

- ・学級担任は、生徒の対人関係能力の低さを感じていても「いつかどこかで学ぶだろう」と考えて放っておいてはいませんか。「教師が育成する」という気持ちをもつことが、生徒の能力を高める第一歩だと思います。また、自己表現力が低い原因に、学級に意見を出せない雰囲気があるのかもしれませんが。発表するときのルールと状況についても把握する必要があります。
- ・友人関係形成に受動的な生徒が増えています。他人と関わり、その結果、傷付くことを恐れているのかもしれませんが。人と関わる喜び、集団活動の楽しさを体験させることが、人間関係形成の意欲につながります。挨拶の大切さ、言葉の使い方、聴く態度や話す態度、友だちの誘い方などの対人関係に関する事柄について、様々な場面で教師が指導を加えます。また日頃、教師自身が「生徒の良いモデル」になれるように心がけることも大切です。
- ・「意見があるときは手を挙げる」「発表するときは立って言う」「話す相手に体を向ける」「うなずきながら聴く」など、これら基本的な事項が守れているかどうかをチェックしてください。これらは小学校では当たり前のように指導をされている事項です。守れていなければ、なぜそうしなければならないのかを伝えるなど、対処をしなければなりません。これは、子どもたちが安心して学習するためのルールなのです。

B. 学習活動

- ・授業に小集団活動を多く取り入れ、コミュニケーション・スキルを身に付けさせることが有効です。年度の初めに、話し合い活動のルールを作り、このルールを遵守させることを継続指導する必要があります。
- ・「リレースピーチ」や「1分間スピーチ」などの取組を行い、人前での発表体験を積み重ねることができるようになります。上手く発表できた仲間に対する拍手も忘れずに奨励していきましょう。
- ・わからないことがあれば教師に質問することを習慣付けるようにします。教師との対話が、対人関係づくりのトレーニングとなり、生徒の経験値を高めることにつながります。

C. 道徳の時間・学級活動

- ・道徳の授業では、「意見交流」を活発にしたいものです。そのためには、「人の意見を真剣に聴く」などの基本的なルールを確立しておく必要があります。意見を発表しやすいように、ワークシートに意見や理由を書き、それを見て発表するようにします。その後、シートを見ずに発表できるように誘導するなど、段階的な指導を加えていきます。また、授業の中は、一人1回以上発言をめざしたいものです。そのためには、読みとるのに時間がかかる資料を避け、生徒全員が理解し意見をもつことができるような資料を用意することが大切です。
- ・学級活動では、ソーシャルスキル・トレーニング（※P. 20②）を積極的に取り入れましょう。特に人と関わるスキルについては、4月や5月の早い時期に取り入れると効果的です。学級でレクリエーションを計画するなど、人と関わる活動を多く取り入れましょう。生徒は、経験不足から他者と関わることを恐れているだけです。他者と関わり、「楽しさ」を感じることができるような場を多く設定していきましょう。



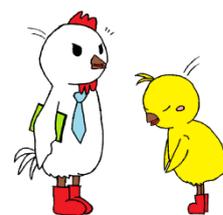
⑤他者配慮力が低い

A. 日常の活動

- ・日本の子どもたちは欧米に比べて、自己表現力より他者配慮力の方が優れているといわれています。それは「謙遜が美德」とされた日本の文化が、長く根付いていた結果と考えられています。ところが、近年の社会変化により人と関わる機会が減り、生徒は対人関係のトレーニングができていないために、他者配慮力が低下しているようです。このことから、学校の中で意図的・計画的にトレーニングする機会を作ることが大切です。
- ・「聴く態度」や「話す態度」といった、人と関わる基本的なスキルを計画的に学ばせるようにする必要があります。もちろん、普段の学校生活の中で、常に教師が注意深く生徒を観察し、継続指導を続けていくことも大切にしなければなりません。「人の気持ちを考えて行動する」といった学級目標を掲げ、学級の生徒全員がこの目標達成に努力をするような「親和的」な学級づくりを、進めていきましょう。
- ・他者配慮力が高いために、自己主張ができなかったり、他者と関わりを避けたりする生徒もいるかもしれません。アサーション・トレーニング（※P. 20③）のように、双方向に意見を出し合い、自分も尊重するが他人も尊重するといった、話し方のスキルを身に付けるようにすることも重要です。

B. 学習活動

- ・個人的な評価を重視すると、生徒の中に「競争」が生じ、他者を認める気持ちが薄れてしまうことがあります。グループ内における評価を多く取り入れ、「協力」や「支援」について重視をしていきます。
- ・他者配慮力が低いために、他人の発言や発表に対して揶揄する態度が見られることもあります。このときに、教師は毅然とした態度で指導をすることが大切です。状況によっては、担任への報告や、学年会での相談が必要になることもあります。
- ・講義形式の授業では、他者配慮力を高めることはできません。教科担任は工夫して、発言や発表を多く引き出す授業を行いましょ。まずは、教師と生徒との対話からトレーニングをさせることも重要だと考えます。
- ・授業開始や終了の挨拶はしっかり行うことが大切です。これがいい加減になっているのは、教師に対する配慮が足りない学級だといえるのではないのでしょうか。教師に配慮ができていない学級に、生徒同士の配慮を望むことはできません。まず、礼儀や挨拶の大切さを理解できるようにしましょう。



C. 道徳の時間・学級活動

- ・道徳の内容項目には、「礼儀」「思いやり」「感謝」といった「主として他の人とのかかわりに関すること（内容項目2の視点）」や、「ルールを守る」「公德心」「集団生活の向上」などの「主として集団や社会とのかかわりに関すること（内容項目4の視点）」などがあります。他人を大切にすることは、自分も大切にされることにつながることを生徒に理解させ、実践意欲を高める道徳の授業を進めていきましょう。
- ・学級活動では、「話し合い活動」を多く取り入れるようにします。この中で、他人の意見を聴く態度や他人に意見を述べる配慮などを身に付けることが大切です。この活動を通じて、学級内での対人関係における基本的なマナーや約束事を確立させ、本音で意見が言える学級集団づくりをめざしましょう。

⑥所属感が低い

A. 日常の活動

- ・規範意識は「この集団（学級）を維持したい」という気持ちが源泉となっており、所属感が大きく関係しています。所属感が低い学級は、協働的な活動をしていないことが多いと考えられます。例えば、学級で活動を行うときに、教師主導で進めてしまったり、マニュアルどおりに生徒にさせたりするなど、生徒の意見や工夫が入る余地を作ることができていない場合があります。また反対に、教師が放任しがちで活動が中途半端に終わることが多く、生徒に成就感をもつことができていない場合もあります。
- ・行事に一生懸命に取り組ませ、学級の仲間と様々な経験を共有することは大切です。例えば学級旗や学級展示などの共同作品を作ることは有効です。生徒の能力を正確に把握し、その上で教師がどこまで支援をする必要があるのかを考え、活動の指示を的確に行います。このとき、個々の役割を明確にし、できたことを褒めたり認めたりすることで、生徒の活動意欲が高まり、一層意味のある取組になると考えます。
- ・自分に自信をもっている生徒は、集団に対する「所属感」が高い傾向があります。自分に自信をもつことができていない生徒は、他者に対して劣等感をもつようになり、「勝ち」「負け」の考えにとらわれ「所属感」も低下してしまいます。生徒同士で互いの「良さ」を認め合うような自尊感情を高める取組は重要です。

B. 学習活動

- ・学級内で存在感をもたせることが、所属感を高めることにつながります。さまざまな方向から評価を行い、全ての生徒にスポットが当たる授業を行うことを心がけましょう。
- ・学級の生徒全員に同じ経験をさせることが、共通の話題づくりにつながり、所属感を生むこととなります。「この子には無理」と、教師が最初から諦めず、学習活動に参加させる工夫を行いましょ。例えば、宿題（課題）を出すときには、最後の一人まで提出することができるよう支援を続けてください。
- ・所属感が低い学級では、自分より弱い立場の生徒に対して攻撃をすることがあります。教科担任は授業のルールづくりを確立させ、生徒の問題ある言動については毅然とした態度で対処することが重要です。

C. 道徳の時間・学級活動

- ・道徳の授業では、意見交流によって他者の「価値観」を知ることが、他者への対応を熟考する良いきっかけになります。生徒から本音を多く引き出す工夫をしていきましょう。所属感が高まりすぎると、自分たちの利益のみを追求し、関わりが薄い集団に対しては無関心で排他的になることもあります。そこで、子どもたちに広い視野をもたせる「ねらい」のある道徳授業を行うことが必要になります。
- ・学級活動では、生徒各自がそれぞれの責任と役割を自覚できるような取組を進めていきたいものです。中学生の時期は、自分と違う価値観で行動する他人を認めることが難しい時期でもあります。しかし、一人一人に違った個性や価値観があることに気付き、それを互いに尊重し合うことで本当の所属感が生まれると考えます。そこで、学級目標や行事の目標を生徒が納得する手順で決め、学級で一番大切にしていきたいもの（「気持ち」や「思い」）について、明確に学級で統一しておくことが大切です。



⑦安心感が低い

A. 日常の活動

- ・安心感が低いと、いじめの問題が存在したり、不調を訴える生徒がでたりすることもあります。このような状況にならないよう、あらゆる場面で学級内にアンテナを張り、未然に防ぐ必要があります。
- ・担任教師は生徒と不断の相互コミュニケーションを通し、信頼関係の蓄積を心がける必要があります。不安感やストレスを感じる生徒が、教師と相談できる関係になっていることが望ましいと考えます。教師の指導基準を明確にし、他の教師や保護者にも共通理解をしてもらえるように働きかけましょう。また、学級目標については学級内で十分に話し合い、掲示をすることで常に確認できるようにします。毅然とした教師の姿勢が、学級の生徒たちの安心感につながります。まず教師への安心感を形成することを心がけましょう。
- ・規範意識が高い生徒に安心感が低い傾向がみられます。これは、ルールや約束事を意識できる生徒は、周囲の状況を心配する気持ちをもつ者が多いことを示します。集団との関わりの中で、安心感が高まるようにしましょう。

B. 学習活動

- ・安心感が低い学級では、生徒が発言や発表することに躊躇してしまうことも多いものです。発言しやすい雰囲気づくりを教科担任は心がける必要があります。
- ・教師は、生徒の発言に対して適切な助言や支援を行い、「次も発表をしてみたい」という意欲がもてるようにします。
- ・「面白くない授業」「わからない授業」「楽しくない授業」では、生徒の「不満」や「不安」が増大して、安心感を育てることを阻害しかねません。教科担任は授業での生徒の反応を踏まえ、常に授業研究を進める必要があります。

C. 道徳の時間・学級活動

- ・道徳の授業では、生徒の意見交流の中で道徳的価値について深く考え、身に付けていくものですが、安心感が低い学級では、意見が出にくくなる傾向がみられます。発問に対する答えに選択肢を設けるといった、自分の立場を明確にしてから理由を述べるようにするなどの工夫が必要だと思います。立場を明確にする工夫として、ネームプレートや付箋を貼りに出る方法、色カードを胸にさす、筆箱の置く位置、ハンドサインなどの方法があるので、生徒が飽きないようにローテーションを考えてみましょう。
- ・学級活動においては、親和的な学級になるような工夫を定期的に計画することも有効だと考えます。特に、入学したばかりの1年生の不安を解消するために、学年として計画を進めることは大切です。班活動や係活動を通じて、生徒の相互理解が進んでいきます。定期的にメンバーをシャッフルし、新しい「出会い」の場を設定していきましょう。



7. 学年会での活用

この「HiYoCoシステム」の結果を学年会や校内研修会などで、学級に関わる教職員が共有することにより、生徒観や指導観を統一することができます。複数の教科担任が指導に関わる中学校において、学級の実態に応じた指導を各教科担任が行うことは、よりよい学年集団・学校づくりにもつながります。

このような学習環境の中で、活動する生徒たちの人間関係は一層深まり、自尊感情が高まり、規範意識が育成されていくと思われまます。

(1) 準備する資料 (教師 1人分)

各学級の分析 (学級分)

全学級の平均値グラフ対比 各年別の平均値グラフ対比

全学級の評価一覧

具体的な取組のヒント (7ページ分)

(3) 具体的な取組のヒント
自己肯定感が低い

A. 日常の活動

- 教師は生徒を「認める」ことを心がけていましょう。無ごなしに指導をすることが多くはないですか。自己肯定感が低い学級は、教師が積極的に学級指導を行っていることが多いです。学級指導の質で人間関係は定まることが多いです。子どもが誇りや自信の源になるのは先生や生徒もときどきあります。このような状態は、規範意識が身に付いているとはいえません。教師が生徒を「認める」ことを率先して行う心がけをしましょう。また、子ども同士が「認める」態度になる機会も有効です。教師は授業や部活動など生徒の活躍について、常にアンテナを据けていき、「褒める」「認める」ための材料を捉えましょう。
- 教師が褒めずして、生徒の自己肯定感が高くなるような指導で、「叱られる」とこへの期待がなくなり、学級に定着させられず居られず、「褒める」基準を下げ過ぎず、生徒自身の中で理想像の基準をつくらせようとする指導を心がけましょう。人に褒められなくても納得し、自分自身を認める、褒める自己肯定感を高めたいと思います。

B. 学習活動

- 教科担任は、学級担任に加えて生徒の人間関係を改善することが望ましいです。「この先生が認められることは自分に自信がある」と生徒からの信頼を得て、教師が「誰かの頼り人」ではなく、「頼り人になる」となることが大切です。そのためには、生徒にとって「おもしろい」「面白い」「楽しい」「自分の意見が認められる」という「思い」をもつことになり、自己肯定感の土壌になります。教師が「おもしろい」として、「自分から質問を聞きたい」と希望をもちながら、生徒は真面目に自分の意見を聞いていくようになります。
- 学級活動では生徒が理事を務めた際、終わったあとに教師が適切な評価をしましょう。「これは良かった」「ここをもう頑張ろうね」というアポイントをするなど、「気持ちは褒めてあげられているんだ」と、自分の存在感を感じます。生徒の活躍を「褒める」とときには、みんなが拍手をするように心がけましょう。

C. 選考の時期：学級活動

- 選考の授業では、教師は生徒の発想を受容的な態度でとらえましょう。受容的な態度を見せると、「もう二度と発想したくない」という気持ちにさせてしまいます。また、生徒の発想を真摯に書くことが大切です。教師が「おもしろい」として「思い」をもつことになり、自己肯定感の土壌になります。教師が「おもしろい」として、「自分から質問を聞きたい」と希望をもちながら、生徒は真面目に自分の意見を聞いていくようになります。

(2) 会議の手順

① 学年の状況の報告 (学年主任より)

資料を見て、学年の状況や問題点について学年主任より会議の主旨を述べます。更に、「学年別の平均値グラフ対比」を参考にして学年の特徴を捉え、学年担当教師の認識を一致しておきます。

② A組の学級担任から、集計結果に関する意見

資料を見て、学級の状況や問題点について学級担任より意見を述べます。資料「具体的な取組のヒント」については、自学級に当てはまる部分があったり当てはまらない部分があったりします。資料は参考として、学級の現状認識を深めることをしていきます。

③ A組の教科担任から、集計結果に関する意見

資料を見て、授業の様子や問題点について教科担任より意見を述べます。このときに、学級や学級担任への非難で終わることがないように注意しましょう。資料「具体的な取組のヒント」の「B. 学習活動」に書かれていることを参考に、皆で学級を成長させる意識をもつことが大切です。

④ A組に対する有効な手だてについての意見交換

学級担任や教科担任からの意見を聞き、学級に対する有効な手だてについて話し合います。問題の対処に終わらずに、「七つの項目 (P. 9)」のどの点を補充する必要があるのか、どの点を伸ばすのかを考えて話し合いを進めましょう。

⑤ A組に対しての学級担任からの願い

最後に学級担任から、「思い」や「願い」を述べ、学年の教師に協力を得るようにします。

※②～⑤を、全ての学級について繰り返します。

⑥ 係よりの意見

道徳の時間の担当、特別活動の担当、総合的な学習の時間の担当、行事の担当などの立場から、有効な取組に関する意見を述べます。

⑦ 学年の短期目標と長期目標

学年主任が今回の会議のまとめを行い、学年の短期目標と長期目標について述べます。

(3) 会議での時間配分

ある学級だけ長い時間を取らないように注意します。全ての学級に対する比重を同等にするように心がけましょう。

【4学級の例】80分の会議と想定して



(4) 校内研修会での活用

校内研修会で活用する場合は学級数を考慮します。小規模の学校の場合は全体会で進められますが、学級数が多い場合は時間の都合で「全体会→学年会→全体会」の順で進めることになります。

複数の学年を受けもっている教科担任には、所属以外の学年会での内容を必ず伝達します。

(5) 継続的な取組へ

学級集団の変化を把握していくためには、「HiYoCoシステム」による分析を、年間に複数回実施することが望ましいと思われます。新しい学級集団となり少し時間が経過した5月、長期休業後の9月や1月など、年に3回程度、定期的を実施することは、学級の諸問題の早期発見にもつながると考えます。

資料 人間関係を深める学習活動例

<①ピア・サポート>

peer「仲間」が互いに支え合う学習活動である。上級生が下級生をサポートして、行事や学習をうまく進められるようにするなど、子どもたち同士で支え合う活動である。この取組は、子どもたちに実体験をさせ、子ども主導で活動を進める取組にすることにより、効果が更に上がる。

<②ソーシャルスキル・トレーニング>

socialは「社会的」「人づきあい」、skillsは「技」「技能」を意味し、「人間関係に関する技能の練習」となる。教師は、子どもたちに知識を教え、モデルを見せ、活動を練習させて、人間関係のスキルを身に付けることができるようにする。

<③アサーション・トレーニング>

assertion「主張」を練習することであり、自分の意見や気持ちをその場にふさわしく表現できるようにするトレーニングである。子どもたちの中には、自己主張が強く攻撃的な言動をする子もいれば、自己主張ができず同調することに終始する子もいる。そこで双方向に意見を出し合い、自分も尊重するが他人も尊重するといった、話し方のスキルを身に付けることができるようにする取組である。

<④構成的グループ・エンカウンター>

encounter「遭遇する」「出会い」であり、カウンセリングの一形態である。リーダー（教師）が用意するプログラムによって、十数名のメンバーが作業・討議・実行をしていくプログラムが中心である。この活動は、子どもたちが自己発見・自己開示・他者への寛容を学び、コミュニケーションの回復と相互に認め合える人間関係を育てていくことを目的としている。

○本冊子で紹介した実践研究の主な内容は、以下の報告書に掲載しています。

京都市総合教育センター 研究紀要

報告 No. 552 中学校における規範意識の育成をめざして

－他者や集団との関わりを大切に考える活動プログラムの開発－

報告 No. 559 中学校における規範意識の育成をめざして

－学級の状態を把握し、人間関係を深め自尊感情を高める指導モデルの提示－

中大路 浩一（京都市総合教育センター研究課）

学級の状態を把握し、規範意識の育成をめざす アセスメント・ツール

「HiYoCoシステム」

発行 平成25年4月

作成 京都市総合教育センター 研究課

〒600-8023 京都市下京区河原町通松原上る2丁目富永町344

TEL 075-371-2705 FAX 075-353-4851



HiYoCoシステム